

認定心理士の会から

「今ここで」と「いつでも」

原稿執筆の前日、所属研究科の修士論文構想発表会が終わりました。教員にも勉強になるため、学内で最も好きなイベントです。もとは対面でポスター形式でしたが、現在はオンデマンドの発表を見て掲示板でコメントするという形で開催しています。以前は、今ここで向き合うことが大事と思っていましたが、いつでも視聴できる開催方法にも、落ち着いて考えをまとめられるというメリットを感じています。

さて、認定心理士の会も開催形式を工夫しながら精力的にシンポジウム等のイベントを開催しております。コロナにより対面開催ができなくなった際も、オンライン支部会による実績と経験があるおかげで、オンライン開催に円滑に移行できたのではないかと思います。今まさに講演や質疑応答が行われている様子をどこでも視聴できる、また、そこに自分の疑問を質問で

きるとい点がリアルタイムでのオンライン開催の魅力であると感じております。

昨年度は、私が所属する東海支部会企画でオンデマンドでの開催も試みました。ただ、個人的には、参加者の皆様に受け入れられる自信があつてオンデマンドを選択したわけではなかったため、かなりドキドキしながらの開催でした。幸い、アンケートでは、予定を合わせやすい、何度も視聴できる、メモをとりやすいといった前向きなお声をいただきました。

今年度は、いくつかのイベントで久々の対面開催もあります。さらに、今ここの参加も、どこからの参加も選択できる対面とオンラインのハイブリッド形式の公開講演会も近畿支部会企画で開催されます。いずれも本稿掲載時には終了していますが、今後も皆様の声をいただきながら工夫して開催していきます。気になるイベントにはどんどんご参加ください。

(認定心理士の会運営委員会委員 松本友一郎)

若手の会から

ママ Ph.D. のたまご

私は現在、博士後期課程に在籍する学生であると同時に、2歳と4歳になる娘たちの母親でもあります。研究者モードと母親モードの間で頭を切り替えながら、目の回るような日々を過ごしています。この度は、各々の環境で挑戦を続ける若手研究者の皆さんに思いを馳せながら、このコーナーで筆を執らせていただきました。

コロナウイルスの流行が、世界中で苦難と混乱を引き起こしたことは言うまでもありません。しかし一方で、この厄災に応じて確立された「新しい生活様式」が、子育てと研究の両立に悩んでいた私に、不幸中の幸いといってもよい恩恵をもたらしたことも事実です。というのも、リモートワークで在宅時間が長くなった夫は、家事や育児の分担をさらに増やしてくれるようになりましたし、私自身は、オンラインまたはハイブリッド開催に変更された国内外の学会に、自宅から参加することができたからです。

このような状況は、コロナ禍を経験しなければ考えられなかったかもしれません。

リモートで研究報告を行ったある国際学会では、ポスター賞をいただくことができました。受賞の連絡をくださった先生とのやり取りの中で、彼女がお孫さんを連れてバカンスに行ったことを知りました。当時の日本は、子どもを連れて遠出するような雰囲気ではなかったことから、少し驚きました。しかし、それ以上に、同じ小さな家族を身近に持ちながらコロナ禍を過ごす者としての連帯意識が芽生えたことを覚えています。

若手研究者であり新米の母親でもある私は、今後もしばらく研究と子育ての「二刀流」を続けることになるでしょう。この奮闘の先に、納得できる結末が待っているのでしょうか。不安に襲われ、挫けそうになることもあります。明日は明日の風が吹く。そう自分に言い聞かせながら、今も机に向かっていきます。

(若手の会幹事 瀧川諒子)